



二宮厚美著

『現代資本主義と 新自由主義の暴走』

浜岡 政好

1990年代後半以降の日本の社会は、バブル経済の破綻に続く長期不況からの脱出と多国籍企業型への社会経済システムの構造転換をめぐる、さまざまな「構造改革」が推進された時期であった。そしてその「構造改革」において日本社会を「診断」し、「処方箋」を書き、「治療」にあたる「主治医」の役割を果たしてきたのは、「新自由主義」というイデオロギーの信奉者たちであった。

この「主治医」たちはメガ・コンペティションを勝ち抜くために、日本社会の「高コスト構造」を是正するという大義名分を掲げて、「規制緩和」を振りかざし、国民生活の基礎的な安定を確保する社会的・経済的施策をも「保護主義」であるとしてその縮小・廃止を進めようとした。

橋本内閣の六大改革はまさに新自由主義の診断と処方箋にそった日本社会の治療方針であったが、国民に「痛み」だけを強いるこうした新自由主義的な方法は、1998年の参議院選挙での自民党に対する国民の手厳しい審判という形で退けられた。またこの処方箋にもとづく勤労国民への負担強化や大規模なリストラにともなう雇用不安の増大などは、消費の抑制をもたらし、長期的な経済不況からの脱却をいっそう困難なものにした。

そして国民の批判が厳しいとみるや、同じ新自由主義の「主治医」たちは、今度は一転して、自らが主張してやまなかった「自助責任」原則を振り捨て、膨大な公的資金を金融資本やゼネコンをはじめとする大企業へ湯水のごとく注ぐ政策をとり始めた。自らの「市場原理」主義の理論的看板を変えずに、金融秩序の維持とか、「日本発の世界恐慌の阻止」などという脅し文句で、自らの理論的立場を否定する政策を処方するというアクロバットをやったのけたの

である。

国民の素朴な官僚主義への批判を追い風に、「市場原理」にもとづく社会経済システムを構築しようとする新自由主義的な政策に対して、少なからぬ国民は1990年代後半の時点においてその現実的效果について疑いの目を向け始めていた。しかし、1998年以後もマスメディアは依然として新自由主義的な「主治医」たちに独占される状況が続いており、その結果、眼前で進行している反「市場原理」的政策を合理化する都合主義的な言説がまかり通っていた。

本書のもとになった二宮厚美氏の諸論考(『エデュカス』、『賃金と社会保障』、『経済』、『前衛』などの雑誌に掲載)は、新自由主義的な言説や政策と日本の社会経済の現実との齟齬があからさまになり始めた1997年から1999年にかけて執筆されたものである。

マスメディアを通じて大量にまき散られる新自由主義的な言説を丹念にフォローし、間髪を入れず反撃するという理論的な仕事は、必要ではあっても筆者も「あとがき」で述べているように研究者にとっては「苦痛感、徒労感」を伴う仕事であることは確かである。まずは時宜にかなった新自由主義に対するイデオロギー批判を忍耐強く継続してきた二宮氏の仕事に敬意を表したい。

本書は、第1章「新自由主義とは何か」、第2章「現代資本主義と新自由主義」、第3章「大競争時代の新自由主義の大狂騒」、第4章「日本版新自由主義者たちの世紀末マスカレード」、第5章「二一世紀の日本経済と新自由主義の戦略」、第6章「教育・福祉の規制緩和と新自由主義」の構成をとっている。

第1章において新自由主義イデオロギーに対する総論的な批判が行われ、新自由主義がどのような理論的特徴を備えているかが分析されている。次いで

第2章ではこの新自由主義が登場する歴史的背景と日本型新自由主義の特質が検討されている。第3章はD. コーテン『グローバル経済という怪物』やA. B. シュムークラー『選択という幻想』などの新自由主義批判を手がかりにして、日本における「グローバル化＝市場主義化不可避論」者（三輪芳朗氏や中谷巖氏）の論説を批判したものである。

第4章では、1998年の秋以降それまでの新自由主義的な構造改革が、リストラや社会保障などのそぎ落としの部分は維持しながらも、かなり修正され、新自由主義の理論的整合性が困難に陥ってきた状況での、堺屋太一氏、田中直毅氏、中谷巖氏などの言説への批判が行われている。第5章で批判の対象になっているのは、1999年2月の経済戦略会議答申「日本経済再生の戦略」である。そして第6章では教育・福祉分野での新自由主義的な政策への批判が行われている。

以上のような本書の展開のなかで、第2章は新自由主義批判の中心に据えられている。したがってここでの二宮氏の新自由主義への捉え方と主な批判点を取り出してみることにする。

まず、何故、新自由主義のような社会経済理論が台頭してきたかについては、1970年代後半以降の世界資本主義の危機におけるケインズ主義の破綻のなかで、新自由主義は財政破綻の主要因を福祉国家とそれを発展させた民主主義に見いだして福祉国家への攻勢を強めて国民への影響力を強めてきたと理解している。

また1990年代においてソ連・東欧体制が崩壊するなかで、新自由主義は福祉国家体制の制限・解体に攻撃の焦点を絞り、グローバル化不可避論を掲げて、「多国籍企業主体の新しい国家類型」を形成しようとしてきているとみる。それが「国家から市場へのパワーシフト」による新自由主義的国家改造であると分析している。さらに「IT革命」などと呼ばれる情報・通信技術の経済活動への応用はグローバリゼーションを加速させ、新自由主義の技術的基礎を与えたかにみえた。

こうした新自由主義の一般的な特徴に加えて、日本型新自由主義には際だったアメリカニズム、「輸出プラス海外生産」、大勢追従傾向が見いだされるとす

る。しかし、少なくともこの日本型新自由主義は、1998年以降、自らの理論によって現実を一貫して説明できなくなったことにより理論としては破綻している。

だが、それにもかかわらず日本では新自由主義者は生き延びて相も変わらずマスメディアを占有している。それは彼らのなりふりかまわぬ「財界利害本位の思考」、すなわち大企業への忠誠心とその反福祉主義が戦後福祉国家の解体の先兵として役立つと財界などから高く評価されているからであろう。

二宮氏が本書のなかで分析している新自由主義の時代的背景やその理論的特徴などは、評者も概ね妥当なものであると考える。また同工異曲の言説にしても、それをその時々社会経済情勢との関連で読み解いて、そのイデオロギーの真の意図を明らかにするという骨の折れる仕事は成功している。そして、新自由主義イデオロギーによる大衆説得の最前線で活躍している著名なスター達のいい加減さを暴き出したのは本書の功績である。

本書のなかで展開されている日本型新自由主義の「主治医」たちの無能さやいい加減さを、その言説によって暴露する仕事をうけて、以後の課題としては、この間に遂行されてきた日本型新自由主義的処方箋にもとづく政策によって、日本経済と日本の勤労者生活がいかに大きな打撃を受けてきているかを事実によって検証する作業が必要になっていると思う。

1995年の阪神淡路大震災後における被災者の生活調査に携わってきて、遅々として進めぬ生活再建の背後には新自由主義イデオロギーによる被災者の切り捨てがあると感じている。私自身もこうした事実による反証を通じて、新自由主義批判の第2ラウンドに加わりたいと思っている。

(新日本出版社・1999年12月刊・2200円)
(はまおか まさよし・常任理事・佛教大学)